

Shakespeare 生誕地の観光化と Marie Corelli の保存運動

桐山恵子

1. Shakespeare Jubilee

シェイクスピア生誕地である Stratford-upon-Avon は、英国の代表的な観光地として有名である。しかしストラトフォードがシェイクスピアゆかりの地としてその名を馳せるようになったのは 18 世紀に入ってからであり、なかでも 1769 年に俳優 David Garrick が当地でシェイクスピア・ジュビリーを行ったことをきっかけとしている。しかし、そもそもシェイクスピアの生誕 200 年を 1769 年に祝うには、5 年のズレがある。その理由は、シェイクスピアの生誕を祝う目的が先にあったというよりは、ストラトフォード新市役所の建設に伴い、シェイクスピアとギャリックが利用されたためだ。建物北側のファサードにシェイクスピアの像を建てると同時に、ギャリックの肖像画も新市役所に展示するという、ギャリックの虚栄心を満たすような提案につられた彼は、喜んで記念祭の企画運営を引き受けた。つまり 1769 年のジュビリーの発端には、新市役所の建設という行政側の事情が関係していたのである。

1769 年 9 月 6 日から 3 日間の予定だった記念祭は、あいにく 2 日目から大雨の天気となる。シェイクスピア劇の登場人物の衣装行列はキャンセル、打ち上げ花火もうまく上がらず、最終的にはエイボン川が氾濫する恐れまで出てきてしまい、早々にストラトフォードから引き上げる人も出始める。しかし 3 日目のメイン・イベントだった **Shottery** での競馬はどうか開催に至り、大勢の人が参加したジュビリーは、夜通し続いた晩餐会が 4 日目の早朝に終わると同時に終幕を迎えたのである。

ギャリック企画のイベントのなかでも、豪華な朝食会や晩餐会などの参加者は London からの上流階級が中心だったように、19 世紀前半まではストラトフォードへの訪問客は富裕層が中心だった。しかし 1859 年の当地への鉄道の開通以来、労働者階級も増え、大勢の観光客が押し寄せるようになる。現在、私たちがストラトフォードを訪れるなら、シェイクスピア劇の鑑賞は観光の大きな目玉のひとつだろう。しかし、ヴィクトリア朝の人々にとっては、劇の鑑賞は必ずしもストラトフォード観光の目的には含まれていなかった。それを裏づけるように、1769 年の記念祭のイベントにも、ギャリックは役者にもかかわらず、劇そのものの上演は含まれていなかったのである。また 1879 年には Shakespeare Memorial Theatre がオープンするが、劇は見ずに、シェイクスピアに関する picture gallery だけを見て帰る人も多く、劇場が赤字から抜け出したのはようやく 1925 年になってからだ。つまりストラトフォード観光の目的は、劇の鑑賞ではなく、あくまでもストラトフォードの Henley Street で生まれ、同じくストラトフォードの New Place で亡くなったシェイクスピアという一人の人物だったのである。

2. 「巡礼」の地、ストラトフォードをめぐるアメリカン・マネー

宗教的な権威が衰えていくにつれて、聖人の聖地詣でに代わり、芸術家詣でが台頭してくる。ストラトフォードを訪れた Washington Irving が “I had come to Stratford on a poetical pilgrimage” (225) と述べるように、シェイクスピアゆかりの地への訪問は「巡礼」とみなされた。そして聖地巡礼には聖人の聖遺物が欠かせないように、“St. William of Stratford” (Thomas 253) にも聖なる遺品が必要となり、カップやランタンなど詩人ゆかりの様々な品物が売り買いされていく。なかでもシェイクスピア使用の椅子は、何世紀にもわたり、観光客に売られるたびに復活し、商業化の流れのなかで永遠に再生産されていった。

こうしてシェイクスピアはストラトフォードの聖人の地位を獲得した大詩人となっていくが、聖地であるべきシェイクスピア生家が、1847 年に存亡の機におちいる。家が public auction にかげられることになり、サーカス興行師であるアメリカ人 P. T. Barnum が購入を目論むのだ。その際、英国のマスコミを中心に “anti-American sentiment” (Thomas 255) が起こり、Charles Dickens などを中心となり、購入資金を募る Shakespeare Birthplace Committee が設立される。その結果、委員会は 3000 英鎊で生家を落札することに成功し、バーナムの計画を阻止することができたのだ。この時、生家を購入しようとしたのがアメリカ人ではなく、イギリス人だったなら、ここまでの反発は起こらなかったかもしれない。シェイクスピアと彼に関する史跡は、英国を象徴するナショナル・アイデンティティとなっており、それをお金の力で奪おうとするアメリカに対する反発がここに見られるのである。

3. Marie Corelli の史跡保存運動

19 世紀にストラトフォードを訪れた有名な文学者は大勢いるが、シェイクスピアへの思慕がつのり、訪問するだけでは満足できず、最終的にストラトフォードに永住したのがベストセラー作家マリー・コレリ (1854-1924) だ。コレリが住んだ家 Mason Croft は、現在、Birmingham 大学の Shakespeare Institute となっており、建物にか

かけられた Blue Plaque には、“novelist and protector of local heritage lived and died here 1901-1924”と記載されている。当時は、エドワード 7 世の戴冠式にも招待されるほどの有名人だったコレリは、シェイクスピアと同様にストラトフォードにおける注目の的だった。観光客は、シェイクスピア生家や Anne Hathaway の家のみならず、Church Street に建つコレリの家、メーソン・クロフトへも足を運んだのである。

ストラトフォードに住居を定めたコレリは、以後、歴史的な遺産の保存運動に熱意を傾けていく。ここからコレリが関わった、シェイクスピアゆかりの史跡保存運動の具体例を見ていきたい。

シェイクスピア女優 Helen Faucit の夫が、妻の業績を記念して、彼女の像を Trinity Church のシェイクスピア像の向かい側に建てようとして計画する。しかしコレリは、このような計画は詩人への冒瀆に他ならないとして反対する。そして当時、教会が抱えていた負債 900 鎊をコレリが個人的に支払うことを条件に、像の建設を取りやめさせたのである。

またストラトフォード市長 Archibald Flower が、アメリカの富豪 Andrew Carnegie の寄付で、ヘンリー・ストリートに Free Library を建設しようと企てる。図書館建設のためにシェイクスピア生家近くの家が壊されることを知ったコレリは、新聞などのマスコミも利用し様々な反対運動をくりひろげる。ここでコレリの史跡保存に対する考え方的一端を知るために、彼女が Morning Post に寄稿した記事の一文を引用してみたい。“According to present plans, there will be considerable demolition in one of the most traditional quarters of the town”(Corelli 9、強調は筆者)。つまりコレリにとっては、シェイクスピアの家一軒が保存されるだけでは不十分で、詩人の家の周辺を含む調和のとれた街並み、としての保存を重視していたことが分かる。しかし街並み保存を訴えるコレリを支持する人がいる一方で、保存運動に反対し、彼女を中傷する記事を投書する人も多かった。そのためコレリは名誉棄損の裁判まで起こすことになるが、かえって世間の注目を広く集めることになり、結果、図書館建設は中止、ヘンリー・ストリートは元の姿のまま守られたのである。

コレリがカーネギー図書館の建設に反対したことからすると、次の史跡保存に関する彼女の行動は矛盾しているように思えるが、のちにコレリはアメリカの財力を積極的に利用することにより、16 世紀の建物の修復保存に成功している。その建物とは High Street に位置する Harvard House だ。コレリは Thomas Lipton に招待された船のクルーズでシカゴの富豪 Edward Morris に出会い、英国とアメリカの友好関係を記念して、この家の保存のために資金を提供してくれないかと持ちかける。というのも元この家の持ち主だった Katherine Rogers がロンドンの Southwark 出身である Robert Harvard と結婚する。サザークには Globe Theatre があったことからシェイクスピアとのつながりを見だし、さらにロバート・ハーバードの子孫である、John Harvard がアメリカでハーバード大学を設立したことにより、シェイクスピアとアメリカがつながったのである。アメリカをよく思っていなかったはずのコレリだが、この時はモリスを巧みに説得することに成功し、アメリカン・マネーに頼ってまでもストラトフォードの街並みを守ろうとしたのである。

4. 結び

過去から現在に至るまで、多くの観光客を魅了してきたストラトフォードを“the world's first theme-park”(Watson 215)とみなすなら、そこでのシェイクスピアの魔法は力を失うどころか、その力を増している。一方、一時は同じテーマ・パークの人気アトラクションとして、シェイクスピアと並ぶほどの人気を誇っていたマリー・コレリの魔法は、時がたつにつれて消えていってしまった。しかし、今のストラトフォードの街並みが魔法のように美しいとすれば、その魔法の力の一部はまちがいなくコレリに由来する。作家としての現在のコレリの知名度がかつてには到底およばないにしても、コレリがシェイクスピア生誕地の街並み保存に少なからず貢献したことはもう少し知られ、その功績を認められるべきではないだろうか。

引用文献

- Corelli, Marie. *The Plain Truth of the Stratford-On-Avon Controversy: Concerning the Fully-Intended Demolition of Old Houses in Henley Street, and the Changes Proposed to be Effected on the National Ground of Shakespeare's Birthplace*. London: Methuen, 1903.
- Irving, Washington. “Stratford-On-Avon.” *The Sketch-Book of Geoffrey Crayon, Gent*. Oxford: Oxford UP, 2009. 224-239.
- Thomas, Julia. “Shakespeare and commercialism.” *Shakespeare in the Nineteenth Century*. Ed. Gail Marshall. Cambridge: Cambridge UP, 2014. 251-268.
- Watson, Nicola J. “Shakespeare on the tourist trail.” *The Cambridge Companion to Shakespeare and Popular Culture*. Ed. Robert Shaughnessy. Cambridge: Cambridge UP, 2007. 199-226.